

F D



2013 Mutual Faculty Development



2013 京都大学のFD

— 京都大学の教育を、語り合う —



2014年3月 京都大学FD研究検討委員会

目次

- 1 ごあいさつ
- 2 工学部教育シンポジウム
- 4 大学院総合生存学館（思修館）の博士課程教育
- 6 学習支援サービスPandAのご紹介
- 8 京都大学OCWから おすすめ授業
- 10 文学研究科プレFDプロジェクト
- 14 大学院生のための教育実践講座
- 16 新任教員教育セミナー
- 20 勉強会

■ 京都大学FD研究検討委員会では、以下のような活動を行っています。

■ 高等教育研究開発推進センターが企画・実施してきた公開授業・検討会を、2008（平成20）年度からFD研究検討委員会の主催事業として年1～4回開催しており、全学的な参加を呼びかけています。

■ 2009（平成21）年度からは、公開授業・検討会に加え、文学研究科プレFDプロジェクトとして、同研究科のOD（オーバードクター）が担当する学部生向けゼミナールを公開し、授業終了後検討会を行っています。

■ 2010（平成22）年度からは、本委員会主催による「勉強会」および高等教育研究開発推進センターとの共催による新任教員教育セミナーを実施しています。

京都大学のFD

FD研究検討委員会委員長 宮川 恒



京都大学ではFDに関する様々な取り組みがおこなわれています。本FD研究検討委員会は2006年に研究科長部会の下に特別委員会として設置され、高等教育研究開発推進センターの協力を得て京都大学のFDを企画・実施してまいりました。本報告書はその一端を学内の皆様にご紹介するために毎年作成しているものです。

京都大学のFDは、一般的にFDの典型となっている啓蒙型ではなく、「相互研修型」FDが自由と自主を基礎とする研究者集団にとってよりふさわしいという考え方を基本としています。相互研修型FDとは、「それぞれに固有の文脈に埋め込まれた自律的な教員・組織が、相互に影響し、協働しあいながら、教育する集団として形成されていくことをめざす」（田中毎実前委員長）ものです。その方針の下で、これまでに様々な分野の教員が集団的に一つの授業に参加し検討する公開授業・検討会が定期的に実施され、京都大学の組織的な取り組みとして実績をあげてきたところですが、2013年度は諸般の事情により開催が適いませんでした。しかしそれを補うべく、このところどんどん充実しつつある京都大学オープンコースウェア（OCW）がFDにも活用できるはずと、授業改善の参考となる「おすすめ授業」を推薦していただき、本委員会のHPで公開いたしました。本報告書でもそのリストを紹介していますので、研修に活用していただければ幸いです。

さて、昨今、大学の教育改革が議論される中で、「単位の実質化」が一つの重要なキーワードになっています。大学設置基準の「1単位=45時間の学修」という定義をしっかりと適用して教育の質を向上させましようという趣旨で、具体的には授業時間内だけではなく、授業

時間外にも学修が有効に進められるような指導がこれまで以上に求められ、さらにはそれが適切に実行されているかどうか大学の一つの評価基準としてチェックされるということです。学生の自主的な学習の支援は、自学自習をモットーとして掲げる本学における重要テーマで、それがどうあるべきかについてはこれまでも繰り返し議論されてきました。しかしその議論が実際に自主的な学習を促すことに結びついているかと問われると、自信を持って「はい」と返事ができないのが現状です。また当委員会が取り組んできた上記の公開授業・検討会や、文学研究科プレFDプロジェクト、大学院生のための教育実践講座、さらに新任教員教育セミナーなどのFD活動においても、どちらかと言えば授業そのものをどう構成するかという点に力点が置かれ、授業外学習というところまでは十分に考えが及んでなかった嫌いがあります。今後は、授業外時間を含めた授業をどのように設計していけばよいかをもっとしっかりと考え議論していく必要があり、そのためのFDの役割は大きいと言えるでしょう。本年度の勉強会では、この観点から「自主的な学習の支援」をテーマとして取り上げました。またその際に紹介された学習支援システムの一つであるPandAについては、本報告書に解説を書かせていただきました。

社会の情勢が大きく変化し、学生の気質も変容する中、教育に求められることも変わってきています。今後も本委員会は、授業改善をはじめ様々な教育課題への対応とその改善を目指して、活動を充実させてまいりますので、教職員の皆様のなおいっそうのご協力をお願いいたします。

第9回 工学部教育シンポジウムの実施

平成25年12月6日(金)16時30分～20時、
桂キャンパス桂ホールと遠隔会場（吉田キャンパス工学部3号館北棟1階N1講義室）にて、
第9回工学部教育シンポジウムが開催され、
162名(桂キャンパス：110名、吉田キャンパス：52名)の工学部教職員及び工学研究科大学院生が参加しました。

16:30～16:35	開会挨拶（工学部長 北野 正雄）
16:35～17:05	話題提供 「メディアやテクノロジーを利用した大学教育の最新動向」 高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透
17:05～17:35	話題提供 「国際高等教育院における教養共通教育の改善に向けた検討状況」 副教育院長(法学研究科教授) 土井 真一
17:35～17:45	休憩
17:45～18:45	「教育改善に向けて 私の授業アンケート結果を受けて」 ① 建築学科 高田 光雄 ② 情報学科 永持 仁 ③ 工業化学科 中尾 佳亮
18:45～19:15	話題提供 「地球工学科国際コースにおける学部教育の現状と課題」 金 哲佑
19:15～19:30	「委員長総括」 新工学教育プログラム実施専門委員会委員長 西山 峰広
19:30～20:00	ディスカッション





工学部教育シンポジウムは、工学部授業アンケートの結果を基に、工学部教育のFD活動と教員相互の研修を目的として、平成17年度より毎年開催しています。

第9回目となる今回は、北野正雄工学部長の開会挨拶の後、高等教育研究開発推進センターの飯吉透教授より、MOOC (Massive Open Online Courses) などに代表されるオープンエデュケーションやアクティブラーニング等のメディアやテクノロジーを利用した大学教育の最新動向について話題提供がありました。

続いて、国際高等教育院副教育院長の土井真一教授より、国際高等教育院における教養共通教育の改善について、基本方針や科目の内容等の検討、初年次教育、国際化対応、教育環境整備などの観点から、取組状況や展望についての話題提供があった後、工学部から3名の教員が、「スタジオ方式やフィールドワークを導入した演習」(高田光雄教授)、「学生による授業アンケートに基づいた教育改善」(永持仁教授)、「学ぶことの意義や思考のプロセスを重視した授業」(中尾佳亮准教授)などの取り組みを紹介しました。さらに金哲佑教授より、平成23年に開設された地球工学科国際コースにおける学部教育の現状と今後の課題について、話題提供がありました。最後に、西山峰広新工学教育プログラム実施専門委員会委員長より、定点観測データに基づいた、学生の履修登録科目数と試験合格率や単位取得率の関係について、「平成24年度と平成23年度の入学生を比較すると、履修科目数はわずかに減少する一方で、単位取得率はわずかに増加」、「履修登録科目数が20を越えると単位取得率が低下する」等の分析結果報告がありました。講演終了後まで、遠隔会場からの参加者も含め活発な質疑応答が行われ、大変盛り多いシンポジウムとなりました。

■ 工学部教育シンポジウムの経緯

1996年、大学院教育課程、国際競争力、達成度判定といったさまざまな角度から工学部の教育を検討し、工学部の教育を改善するという動きのもと、8大学工学教育プログラム委員会が発足しました。これは今もまだ続いている取り組みで、各大学から、産業界からの参加者を推薦していただくことによって、産業界の方々も巻き込んだ教育改善のための議論を展開しています。

2000年には、日本技術者教育認定機構 (JABEE) を利用した、技術者教育プログラムの審査・認定評価を受けるための試行などが行われました。この流れを受けまして、京都大学工学部では、2000年に、工学部のFD活動推進の中心的存在として、新工学教育プログラム実施専門委員会を発足させました。

委員会発足直後に行われた特に顕著な取り組みは、2000年から2002年にかけて3年間にわたって行われた、ディベート型の工学部FDシンポジウムです。2回生、3回生対象の専門科目の幾つか、そして工学部の提供する全学共通科目について、学生のアンケートを取ったうえで、学生役、教官役、中立の立場と、役割を担っていただきながら、教育改善のためのディスカッションを行いました。この活動は日本工学教育協会工学教育賞、文部科学大臣賞を受賞しました。

これらの活動を受け、2004年以来、高等教育研究開発推進センターの推進する特色GP「相互研修型FDの組織化による教育改善」と共同して、工学部のFD活動で得られるデータを分析し、工学部の教育にフィードバックする取り組みを継続して行っています。そして、この取組の一環として、2005年以降、年に1回、工学部の授業アンケートの結果をもとに、工学部教育のFD活動と教員相互の研修を目的とした「工学部教育シンポジウム」を行い、工学部の教員・大学院生のための教育改善・情報共有の場を設けるようになっています。2007年度より、全学レベルでFD研究検討委員会が発足してからは、FD研究検討委員会の協賛も得られています。

大学院総合生存学館(思修館)の 博士課程教育

FD研究検討委員会委員
総合生存学館教授
(思修館プログラム担当)

惣 脇 宏

1. 目的とカリキュラム

総合生存学館は、平成25年4月に設置された5年一貫制博士課程の大学院である。平成23年度文部科学省博士課程教育リーディングプログラム(オールラウンド型)に採択された「京都大学大学院思修館プログラム」を実践する大学院でもある。

総合生存学館(思修館)の目的は、高い使命感・倫理観を有するグローバルリーダーとしての責任を持ち、種々のプレッシャーに耐え、広い知識と深い専門性を両立させた柔軟性ある思考で既存の学問や課題領域を束ねることができ、かつ国内外での豊富な実践教育を通じて、「現場」での的確な判断力・行動力を備えたリーダーを育成することである。

授与する学位は博士(総合学術)である。カリキュラムとしては、学位論文研究指導とともに、様々なコースワークを重視している。授業科目は、専門科目のほか、「八思」と名付けた8分野の共通基盤科目を開設している。さらに1・2年次の「熟議」には産官のリーダーを招聘し、講義とディベートにより問題の発見と解決策の探究を行っている。また、1・2年次には国内外サービスラーニングを実施しており、4年次には1年間のフィールドワーク(海外武者修行)、5年次にはプロジェクトベースリサーチ(発展型プロジェクトベースラーニング)を予定している。

このようなカリキュラムを学生ごとにテラーメイドで組むとともに、各学生について、教育指導及び研究指導教員並びにメンター教員からなる複数指導体制をとっている。専門分野の研究指導には他研究科の教員の協力を得ている。

2. 多様な学生集団

平成24年10月に学内の修士課程1回生から7名のプログラム生を受入れた。平成25年4月には総合生存学館1回生10名を受入れ、その出身大学は京都大学5名、他大学5名(うち1名は米国の大学)であった。1・2回生の出身学部は、文学、教育学、法学、経済学、理学、薬学、農学などと幅広く、中国及び韓国からの留学生も1名ずつ在籍しており、学生集団は極めて多様である。

全員が合宿型研修施設で起居しており、正課以外の自主的な活動としての学内外のワークショップや勉強会の開催や参加も盛んである。教員が研修施設で学生の相談に応じられるよう、オフィスアワーを毎日設定している。

4年次の海外武者修行について、学生はOECD、IMF、FAO、UNESCOなどにおけるインターンシップを希望して準備をしている。海外武者修行やプロジェクトベースリサーチを経験することによって、将来の進路につながるものと考えている。



国外サービスラーニング(平成25年8月、バングラデシュ)

3. 国際シンポジウムなど

平成25年3月には UNESCO や OECD のほか、大学や国際 NGO などの専門家をパネリストとして、平成26年2月にはハーバード大学公共リーダーシップ学のバーバラ・ケラーマン教授を基調講演者として招聘した。

このほか、機会をとらえて特別セミナー等を開催している。平成25年度には、在バングラデシュ日本国特命全権大使の佐渡島志郎氏、ヨーロッパ議会のエンリコ・ダンプロージョ氏、国際ジャーナリストのブルース・ストークス氏、UNDP 特別顧問の河野毅氏などによるセミナーを開催した。



国際シンポジウム（平成25年3月5日）



熟議（平成25年4月13日、堀場雅夫特任教授）

4. FD

総合生存学館提供の科目については、シラバスの整備を行うとともに、授業評価アンケートを取って授業改善に役立てている。また、各種のプログラムや活動の計画立案・準備・実施にあたっては、学館内の会議で検討するほか、専任教員による懇談会をはじめ、教育指導及び研究指導教員並びにメンター教員による情報共有を頻繁に行っている。熟議をはじめとして、国内外のサービ斯拉ーニングの事前説明会や成果報告会、研究の進捗状況を発表する学生主催の懇話会、総合生存学の構築を図るための教員主催の懇話会や様々なワークショップに教員は可能な限り出席しており、共通理解を図って学生指導に反映させている。外部評価は2年ごとに受けることとしており、平成24年度末に第1回の外部評価を行った。複数教員による指導体制とともに、これらの活動が、FDとしても機能していると考えているところである。



茶道を英語で学ぶ（平成25年11月9日）

コラム1

リーダーシップ

思修館プログラムの主要な目的はリーダーシップの育成である。しかしリーダーシップは、必ずしもリーダーシップ論によって教えられるものではなく、様々な活動を通して、自ら感じ取り、獲得するものであろう。このため思修館では、1年次の国内サービ斯拉ーニングで京都市などの協力を得て福祉施設でのボランティア活動をし、2年次には JICA 等の協力を得て国外サービ斯拉ーニングを経験することにより、多様な地域・環境における文化や立場への理解を深め、他者のために行動できる社会性・人間性の醸成をめざしている。このような活動について各自が省察を深めることができるよう、Global Leadership Rubric を作成し、e-Portfolio を開発しているところである。

一方、国際シンポジウムではリーダーシップを正面からテーマに掲げている。今後、4年次の海外武者修行において、自らのテーマにおける課題解決策・実効的推進策を確かなものとするとともに、5年次のプロジェクトベースリサーチでは研究の成果を社会へ展開するため、自らプロジェクトを企画・立案・実施することを通じて、リーダーシップを身に付けることを期待している。

コラム2

総合生存学の構築

総合生存学とは、人類と地球社会の生存に関わる環境問題、エネルギー問題、食糧問題、パンデミックなどの地球的課題を克服し、持続可能な未来を作り出すために、関係する諸々の学問体系の知を結び付け、編み直し、駆使して、複合的な社会課題の発掘・分析と定式化・構造化を行い、社会実装までの解決を探究する学術の総体であり、「生存知の構造化と公共化」を対象とする総合学術である。

このような専門性と最初の手がかりとして、1年次の必修科目として「総合生存学概論」を開設するとともに、学生が研究活動を自ら省察できるよう、Ph.D. Values Rubric を作成している。

研究面では、総合生存学を作り上げていくため、月に一度、午後6時から9時までの3時間、毎回2件の話題提供を中心に、学生も交えて自由な発想で議論する思修館懇話会を開催している。また、学生も自主的に学生懇話会を開催し、教員も参加している。

学習支援サービスPandA のご紹介

FD研究検討委員会委員
国際高等教育院
学術情報メディアセンター

喜 多 一

教育を支える情報システム

本学の教員のみなさんは教務情報システム KULASIS はよくご存じだと思います。教員にとってはシラバス登録、履修者名簿確認、成績登録などにお使いだと思いますし、学生は科目を選択・登録したり、成績を確認したりしています。このような学務の定型業務を支援するためのシステムは一般には学生情報システム (Student Information System, SIS) と呼ばれます。

オープンコースウェアもご存じの方が多いかと思います。これは授業で使われているシラバスや講義ビデオ、講義ノートなどのコンテンツを社会に公開するためのシステムです。

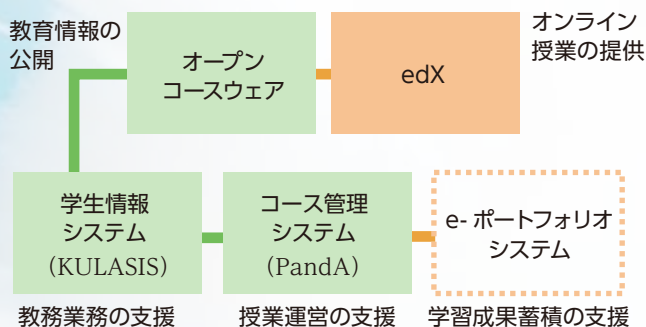


図1 学生情報システムとコース管理システム

これに対し PandA はコース管理システム (Course Management System, CMS) と呼ばれるシステムに該当します。実際の授業の中で資料を電子的に配布したり、課題を提出してもらったり、小テストやクイズをしたり、教員や学生が自由に書き込んで討議するフォーラム (掲示板) などを運用するためのシステムです。米国では CMS 自身はどの大学にも導入されていますが、図2は米国での CMS の利用状況を利用科目数の割合で示したもので、最近では6割ほどの科目で CMS が使われているということになります。

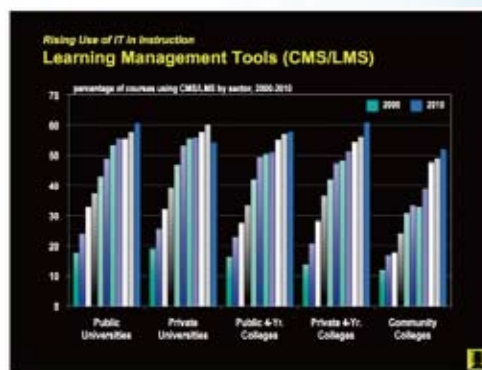


図2 米国における CMS の利用状況
(K.C. Green, Campus Computing 2010, EDUCAUSE Conf. 2010)

PandA の概要

PandAは米国の研究大学を中心に開発や利用が行われているSakaiというオープンソースのCMSを用いて構築しています。国内では本学のほか法政大学も Sakai を大学規模で利用しています。これまで情報環境機構では商用のCMSを運用してきましたが、本年度から Sakai に切替えるとともに、愛称やビジュアルデザインを学生に公募して決定しました。PandAはPeople and Academeを略したもので、図3の画面の左上にある黒丸3つのシンボルマークは「システム」を介在して「人々」と「学術」がつながるということを表しています。

PandAは KULASIS と連携しており全学共通教育とすべての学部科目、多くの大学院科目で KULASIS から科目と担当教員、学生の履修登録の情報を設定しています。履修登録は予備登録段階から毎日更新していますので、各学期の比較的早い段階からご利用いただけます。平成26年度からは KULASIS の各授業のページから PandA のコースサイト (その科目で使うための PandA 上のページ) に直接移動できるようになりますし、PandA にコースサイトがない場合は自動的に標準的な設定で作成されるようになります。

PandA はこんなふうに使われています

課題提出を効率的に実施する

CMSの最も多い使い方は講義ノートなどの資料配布とレポートなどの課題提出です。工学部の電気電子工学科ではプログラミングの授業で作成したプログラムを PandA で提出してもらい、TAが分担して採点しています。電子メールでの提出に比べ、コメントをつけて返却することなどで教育の質も向上しますし、採点業務が効率化するとともに、教員とTAとの情報共有もできるので管理業務が確実化することとです。

学生の積極的な授業参加を促進する

高等教育研究開発推進センターの飯吉透先生は課題提出に課題ツールではなく「フォーラム」という掲示板型のツールを使っておられます。提出された課題を授業参加者全員で共有することで、授業へのより積極的な参加を促進しようとしておられるとのこととです。

テスト&クイズの活用

もう一歩進んだ使い方にテストやクイズがあります。語学の授業では端末のある CALL 教室を使えるという利点もありますが、音声ファイルを使っての聞き取りのテストなどに使っておられます。また大人数の講義科目は知識を一方的に伝えることになりがちですが、法学部の横山美夏先生はテスト&クイズを使って授業内容を学生に確認させるとともに、学生の理解状況を把握して授業の内容や進度を調整されているとのこととです。

進度のばらつく演習での活用

PandAの機能を統合的に使うツールとして「授業ツール」というものがあります。コンピュータを使った演習科目の悩みは学生の進度がばらつきやすいこととですが、学術情報メディアセンターの上田浩先生は「授業ツール」で演習を提示しています。個々の学生はその内容を確認しながら、PCを使った演習を進め、演習が終わったら授業ツールのクイズに答えて学習を終了します。こうすることで、学生は自分のペースで学習を進めることができ、教員やTAは質問のある方への対応に集中できるとのこととです。



図3 PandAのログイン画面

PandA を使い始める

初めてPandAを使われる教員の方は単にログインしても、「さて何をしたいやら」、という状態になっています。これは、先生が担当されている授業のコースサイトも開設されていませんし、他の先生方のコースサイトはアクセス許可がなく見えないからです。

まず、情報環境機構が提供しているPandAの教員用マニュアル(※1)をざっと読んでみて下さい。その後は、以下の手順でご利用を始めてください。

- KULASIS からご担当のコースサイトを開設する
- PandAにログインする(※2)(図3)
- 個人設定(メールアドレスや使用言語)を確認する
- ご担当のコースサイト内のツールを使用する

ご利用にあたっての注意

PandAのご利用にあたって以下の3点をご留意ください。

- 1) まず、授業そのものをオンラインで実施することは大学設置基準25条2項では「メディアを利用して行う授業」に該当します。その際、双方向的な運用が求められます(平成13年文部科学省告示第51号とその一部改正(平成19年文部科学省告示第114号))。
- 2) 著作物をPandAのようにサーバに蓄積することは著作権法では「送信可能化権」と理解されており、一定の要件のもとでの教育目的での利用に認められている無許諾での「複製」には該当しません。
- 3) 学生の氏名やIDなどの個人情報については PandA 上での情報の格付けを行って適切な提供がなされるようにしていますが、学生の提出する課題や採点結果については先生方に適切な管理をお願いします。

ICTを活用した教育のこれから

PandAの運用を開始して1年が経ちましたが、まだまだ性能の向上が求められる点などもあります。ご利用に関してご不明な点、ご要望は情報環境機構の教育支援サービス(※3)についてお問い合わせください。ICTの活用は今後も教育改善の重要なツールとなると考えています。学内でも教育関連の会議でちらほら「ポートフォリオ」という言葉を耳にするようになりました。これを電子的に実現する手段としてe-ポートフォリオがありますが、本学ではまだ検討中です。また、オープンコースウェアから発展して、オンラインで授業を提供する MOOC の試みも本学ではedX(※4)に参加する形で始まりました。ツールは技術と共に変わって行きますがよりよい教育はどうすれば提供できるのか、ということをお忘れずに果敢に取り組んでいくことが重要だと思います。

(※1) PandA の教員用マニュアル

http://www.iimc.kyoto-u.ac.jp/ja/services/ecs/PDF/panda_tebiki_f.pdf

(※2) PandA ログイン

<https://panda.ecs.kyoto-u.ac.jp/portal>

(※3) 情報環境機構 教育支援サービス

<http://www.iimc.kyoto-u.ac.jp/ja/services/ecs/>

(※4) edX

<https://www.edx.org/>

京都大学 OCW (OpenCourseWare) (<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/>) では、これまでに2,000もの講義ビデオが蓄積されてきました。このような講義ビデオは、視点を変えると、大学教員にとって自分自身の授業をよりよくするために参考となるアイデアやヒントの宝庫とも言えます。以下に、京都大学OCWより推薦された、授業改善のために参考となる「おすすめ授業」を掲載しています。

今後も、FD研究検討委員会とOCWとの連携により、アクティブラーニング型授業や英語での授業など、授業デザインや教室内で実際に教える際に役立つ講義ビデオを紹介していきます。

「中国文字文化論」

阿辻 哲次 (人間・環境学研究科 教授)

授業形態：講義／対象：全回生

URL：<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/general-education-jp/h207001>

おすすめの理由

先生が中国で撮影された写真、集めてこられた青銅器の複製品や文献などを示しながら講義が進められるため、その時代の技術、それによって残された文字がどのようなものであったか、学生が因果関係を理解しやすいものとなっています。授業で用いられるパワーポイントにおいては、提示された文献・資料画像の本物が展示されている博物館の紹介が多くあり、授業だけに収まらない学習意欲を促進しています。丸善出版の「京大人気講義シリーズ」で取り上げられた先生の講義です。



甲骨(牛骨)



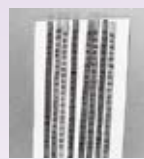
青銅器



帛書



石碑



竹簡・木簡

中国における書写材料の変遷—紙以前

■京大人気講義シリーズ 漢字文化の源流) ■

URL http://pub.maruzen.co.jp/book_magazine/book_data/search/9784621082058.html

「有機分子たちを考えて日常生活を理解しよう」

年光 昭夫 (化学研究所 教授)

授業形態：ゼミ／対象：1 回生／期間：2012 年度・前期

URL <http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/general-education-jp/S176001>

おすすめの理由

「洗濯—なぜ、油汚れが水に " 溶ける " ? — 洗剤の役割 — (第4回)」や「髪の毛とウェーブ (「パーマをかける」って何をしているの?) (第12回)」など、日常生活の疑問を起点として有機化学を理解する講義で、有機化学と日常生活の接点が分かりやすいように授業が進められています。授業中に学生自身が分子模型を作成し、3次元での分子構造の変化を体感するため、紙面上での記号だけの学習より理解がより深まります。



「電子回路」

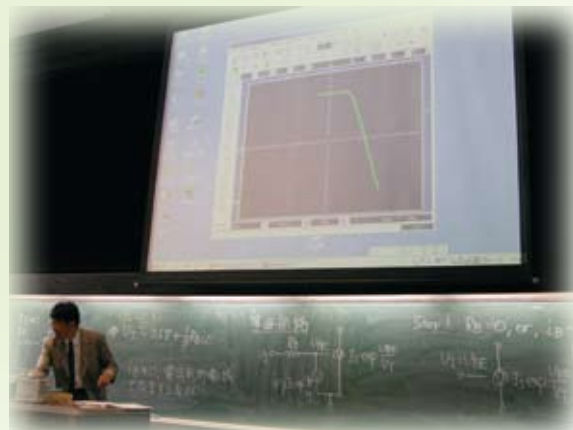
杉山 和彦（工学研究科 准教授）

授業形態：講義／対象：工学部電気電子工学科 2 回生

URL <http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/09-faculty-of-engineering-jp/electronic-circuits>

おすすめの理由

私たちは高度に進化した電子機器に囲まれて生活しています。そのためか大半の学生は、その内部にある電子回路を具体的なものとして触れる経験に乏しくなっています。この講義では電子回路で登場するいくつかの概念を教卓でデモ実験により示し、学生達に具体的なイメージをもってもらうことで、理解を深めてもらおうとしています。OCWでは、デモ実験の内容が見られます（但し、実際の講義中の様子ではなく、実験部分だけ別途撮影したものです）。



「農学の新戦略—増収と環境の調和をめざして—」

リレー講義

授業形態：講義／対象：主として 1・2 回生、全学向／期間：2011 年度・前期

URL <http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/general-education-jp/8993001/video>

おすすめの理由

農業のこれまでの変遷を踏まえ、農業が今、これからの時代どのような可能性を秘めていると各先生が考えておられるのかが示されており、これから学生自身が学習する専門分野を選択する為に役立つ授業となっています。「農薬や化学肥料は環境に悪い?」「遺伝子組換え作物は危険?」「有機農業で地球人口を養えるのか?」など身近な問題テーマを起点として講義がなされるため、これから学生自身が学習する専門分野と社会の問題点との接点が理解しやすくなっています。



ミャンマーと中国の国境付近の様子

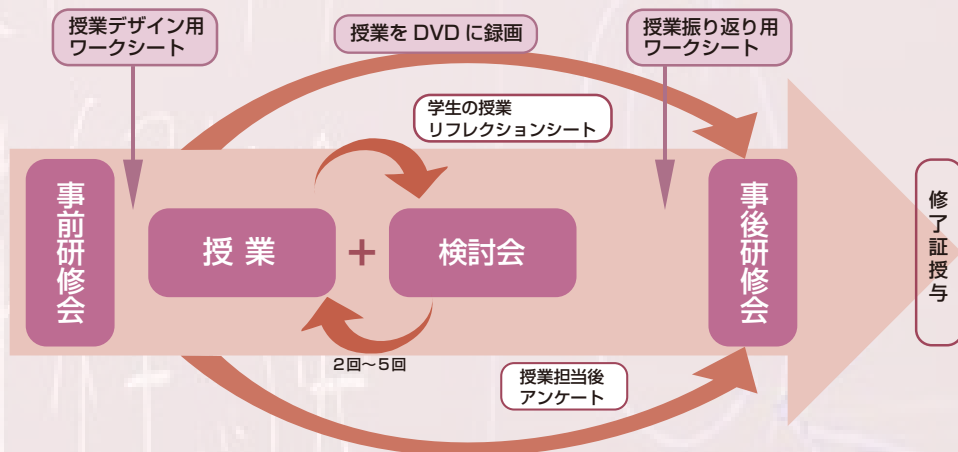
森林を開いた畑で中国向けのトウモロコシ（収穫期を迎え枯れ上がっている）と地元民の主食の陸稲（緑色、あとひと月で収穫）が栽培されている。

プレFDとは?

プレFDとは、これから大学教員（ファカルティ）になろうとする大学院生や OD（オーバードクター）・ポスドクのための職能開発の活動のことです。大学教員の仕事には、教育、研究、管理・運営、社会貢献などがありますが、プレFDでは、なかでも教育能力の開発に重きが置かれています。「プレFD」というのは和製英語で、アメリカでは、Preparing Future Faculty (PFF) と呼ばれています。日本では、2008 年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において、「教育研究上の目的に応じて、大学院における大学教員養成機能（プレFD）の強化を図る」とされたことも手伝って、この数年、プレFDを実施する大学が増えてきました。代表的なところでは、京大の他に、名古屋大学、広島大学、東北大学、北海道大学、一橋大学、筑波大学、東京大学などがあります。

文学研究科プレFDプロジェクト

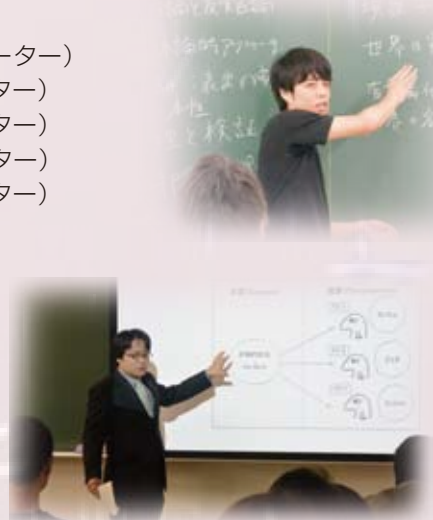
文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する文学研究科のオーバードクター（OD）によるリレー講義形式のゼミナールであり、事前研修会、公開授業とその検討会、そして年度末の研修会によって構成されています。具体的には、全ての授業を公開とし、毎回の授業終了後20分程度の授業検討会を行います。一人の講師は2回から5回の授業を行い、自分の授業が無い時には他の講師の授業を参観、検討会への参加という形でゼミナールに参加します。全ての授業が全て終了した段階で研修会を行い、自分自身の教育活動を振り返る作業を行います。なお、このプロジェクトの企画・運営は、高等教育研究開発推進センターの協力のもと行われています。



2013年度文学研究科プレFDプロジェクト実施体制

伊勢田 哲治	文学研究科准教授（総括コーディネーター）
櫻井 芳雄	文学研究科教授（行動・環境文化学系コーディネーター）
福谷 茂	文学研究科教授（哲学基礎文化学系コーディネーター）
氣多 雅子	文学研究科教授（哲学基礎文化学系コーディネーター）
伊藤 和行	文学研究科教授（基礎現代文化学系コーディネーター）
永井 和	文学研究科教授（基礎現代文化学系コーディネーター）
小城 拓理	教務補佐員（行動・環境文化学系）
田林 千尋	教務補佐員（哲学基礎文化学系）
赤嶺 宏介	教務補佐員（哲学基礎文化学系）
佐金 武	教務補佐員（基礎現代文化学系）

大塚 雄作	高等教育研究開発推進センター長
松下 佳代	高等教育研究開発推進センター教授
田口 真奈	高等教育研究開発推進センター准教授
田中 一孝	高等教育研究開発推進センター特定助教



文学研究科プレFDプロジェクトを振り返って

■総括コーディネーターから

昨年に引き続き今年も総括コーディネーターを務めさせていただいた。とはいえ、昨年同様、私自身がしたことはほとんどない。各系のコーディネーターのみなさんと優秀な教務補佐員たちが運営の実質を担い、わたしはもっぱら勤務表の管理だけをさせていただいていた。今年度は年度途中でその教務補佐員の一人が都合により降板することになったが、これについても急遽経験者に交代していただくことができ、大きな問題は生じなかった。関係するみなさんのご協力に感謝したい。

プレFDも5年を経て、過去の参加者の就職の話聞くことも多くなった。「プレFDの経験が就職後役に立った」「面接の際にプレFDについて聞かれた」「教務補佐員をやっていたことが就職の決め手になった」など、このプロジェクトに参加したことがプラスに働いたという声を聞くたびに、いろいろ苦労がありつつもこのプロジェクトを続けてきてよかったと思う。

本プロジェクトは4年目までは本部からの援助を得て開催されてきたが、今年度からは援助が打ち切れ、文学研究科の内部の資金だけでやりくりしている。文学研究科自体の予算も削減される中でも今後もなんとか続けられるよう、このプロジェクトの意義について内外に広く訴えていければと思う。

(文学研究科准教授 伊勢田哲治)



■各系のコーディネーターから

行動・環境文化学系

今年度のプレFDプロジェクトは後期の行動・環境文化学系ゼミナールⅡで実施しました。出席する学生は毎回40名以上で、それは最後の1月になってもほとんど減りませんでした。質問も少なからずあり、5限であるにも関わらずほぼ全員覚醒していることなどから、各回の講義が学生の興味を十分引き付けていることを、講義室の後ろでいつも実感していました。プロジェクトの講師は5名(各2回)でしたが、そうでない講師の何人かも検討会を希望しましたので、ほぼ毎回、講義後に検討会を開きました。そこでよくわかったことは、講師の皆さんがしっかり準備して講義に臨んでいること、そして講義内容と進め方について真摯に考えていることでした。当初は、生真面目な講師の皆さんが堅苦しく考えすぎることによって、どの講義も同じような構成と進め方になってしまうのではないかと懸念も持っていました。しかしそれは全く当たらず、講義はどれもきわめて個性的でした。そのことも学生の興味を引きつけ続けた理由の一つかもしれません。講義の質とは、単なる経験年数の関数として向上するものではなく、ひとえに講師の姿勢と個性に依存するものであるという、これまた当然といえば当然のことを、若い講師の皆さんから教えられた半年間でした。

(文学研究科教授 櫻井芳雄)



哲学基礎文化学系

小・中学校・高校の教員が授業をするためには大学でさまざまな訓練がなされているのに対して、大学の授業をするための訓練はこれまでほとんどなされてこなかった。大学院を出たばかりのODはずっとそのことに不安を感じていたように思う。実際初めて教壇に立った彼らから、授業の仕方について相談を受けたことがある。このプレFDプロジェクトは、そのような不安を取り除き、授業をするための技法を身につけるよい機会であった。今回参加したODから、□々に参加してよかったという感想を聞いている。初めてコーディネーターとして参加した私自身、長年大学の授業を担当してきたにも拘らず、時間の割り振りや黒板の使い方などをほとんど意識してこなかったことに気づかされたばかりか、授業準備にかかるODたちの情熱に強く触発された。授業後の検討会も、正反対の感想が出たりして、忌憚のない意見を交わすよい機会になっている。講師たちとコーディネーターにとって、このプレFDがたいへん有意義であることは間違いないだろう。他方、受講した学生たちにとってのこのプロジェクトの意義は、若い講師たちの学問への情熱を受け取ることであろう。学生たちの掛け値なしの本音を聞いてみたい気がする。

(文学研究科教授 氣多雅子)



基礎現代文化学系

大学教員という職に就いていると、学会等で発表や講演を聴く機会がありますが、他の人の通常の授業を見学することはまずありません。ましてや自分の専門外の分野の授業を見学する機会を見いだすことは不可能に近いのではないのでしょうか。また若い人に授業を見学させて頼んでもきつと嫌がられるでしょう。系ゼミのコーディネーターの仕事でもある授業見学は、専門外の分野に関する最新の研究状況を聞くというとても稀な機会でもあります。そういう点では、コーディネーターというのは意外とおいしい仕事なのかもしれません。

このようなことを書いたのは、文学部で系ゼミが始まって数年が経ち、これからの方向性を考えなければならない時期に来ていると思いますが、実際に系ゼミを見学したことのある教員の数はまだ限られているのではないだろうかと思ったからです。また近年多くの大学で教員募集の際には模擬授業が課される状況になっていることを考えると、研究業績だけでなく、教育経験についても、どのように大学院生、そして若手研究者をケアしていくべきなのかということについて我々教員も考えなければならないのではないのでしょうか。

(文学研究科教授 伊藤和行)



2013年度文学研究科プレFDプロジェクト スケジュールと授業テーマ

■前期スケジュール

文学研究科プレFDプロジェクト事前研修会

2013年4月4日 13:30～15:00 京都大学文学部新館

■哲学基礎文化系ゼミナール

2013年4月11日～7月25日、毎週木曜日2時限 検討会 12:00～12:30

〈授業テーマ〉

赤嶺 宏介 「入門」と「オリエンテーション」：カントによる哲学案内
山田 貴裕 意味論的實在論論争
君嶋 泰明 ハイデガー哲学入門—その初期の歩みから「存在と時間」まで
太田 裕信 京都学派と哲学
前期の総括セッション

■基礎現代文化学系ゼミナール

2013年4月11日～7月25日 毎週木曜日5時限 検討会 18:00～18:30

〈授業テーマ〉

佐藤 夏樹 アメリカ社会とヒスパニック
中尾 央 科学的総合の歴史と哲学
大西勇喜謙 科学的實在論論争入門
吉川 絢子 植民地朝鮮における離婚訴訟
田林 千尋 近代日本における歌謡研究について

■後期スケジュール

■行動・環境文化学系ゼミナール

2013年10月3日～2014年1月30日 毎週木曜日5時限 検討会 18:00～18:30

〈授業テーマ〉

別役 透 動物のナビゲーションに関する比較認知科学
平松 千尋 霊長類における色覚の機能と進化
北島 義和 農村アクセス問題とは何か—私的所有と公共の利益の挟間—
西川 純司 インフラストラクチャーの社会学—モノからみる社会
安井 大輔 多文化接触領域の食からみるエスニシティ
水野(藤井)英莉 生殖技術とジェンダー
山内 熱人 メキシコの農村文化とその生活

■哲学基礎文化系ゼミナール

2013年10月3日～2014年1月23日 毎週木曜日2時限 検討会 12:00～12:30

〈授業テーマ〉

梅野 宏樹 悪いことばかりの世界に神なんかいない……のか？
末永絵里子 考えることを考える—「問題系（プロブレマティック）」とは何か
岩井謙太郎 キリスト教思想入門
上原 潔 宗教多元論とキリスト教
後期の総括セッション

■基礎現代文化学系ゼミナール

2013年10月3日～2014年1月23日 毎週木曜日5時限 検討会 18:00～18:30

〈授業テーマ〉

富永 望 京都市水道百年史
川寄 陽 朝鮮における「皇民化」政策と朝鮮
坂 堅太 戦後日本の「労働」表象について
岡内 一樹 現代社会と環境との関係について
藤川 直也 存在しない者について語る—マイノリティ主義入門

■文学研究科プレFDプロジェクト事後研修会

2014年2月20日 13:30～17:15 吉田南一号館

『未来の大学教員を育てる —京大文学部・プレFDの挑戦』

これまでのプロジェクトの成果として、プロジェクトに関する書籍が勁草書房より刊行されました。本書の大きな特徴として、このプロジェクトに関わってきた文学研究科、高等教育研究開発推進センターのスタッフのほぼ全員が協力して執筆したことがあげられます。本プロジェクトに興味ある方はぜひご覧になって下さい。以下に目次を記します。



『未来の大学教員を育てる—京大文学部・プレFDの挑戦』

田口真奈・出口康夫・京都大学高等教育研究開発推進センター編著

目次

刊行に寄せて (服部良久)

本書の内容と構成 (田口真奈)

第I部

ドキュメント・プレFD (出口康夫)

第II部

第1章 日本の大学教員養成システムとOD問題 (松下佳代)

第2章 プレFDとは何か (田口真奈・松下佳代)

第3章 京都大学のプレFD活動

— 相互研修型FDをめぐる葛藤史に焦点づけて — (田中每実)

第4章 京都大学大学院文学研究科プレFDプロジェクト誕生の背景 (荻阪直行)

第5章 プレFDプロジェクトの概要と実施体制 (田口真奈・出口康夫)

第6章 教務補佐員の仕事 (田林千尋・赤嶺宏介)

第7章 事前・事後研修会のデザインと実際 (田口真奈)

第8章 プレFDプロジェクトを通じた参加者の変化 (溝上宏美・杉山卓史・三宅岳史)

第9章 学生の声を通して理解するプレFDプロジェクト (半澤礼之・小城拓理)

第10章 プレFD研修プログラム・コーディネーターの二年半 (永井和)

おわりに (大塚雄作)

資料

1 京都大学文学部・文学研究科学修の仕組み (坂本尚志)

2 京都大学文学部・大学院文学研究科の教育の流れ (坂本尚志)

3 過去の講義一覧と担当者一覧

4 プレFDポスター

用語解説 (坂本尚志・田川千尋)

大学院生のための教育実践講座

大学院生のための教育実践講座とは

大学院生のための教育実践講座は、京都大学FD研究検討委員会が主催となり、将来、大学教育に携わることが希望している本学の大学院生（PD、研修員などを含む）のために、ファカルティ（大学教員）へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。

本講座では、初参加者向けの Basic コースと本講座参加経験者及び大学授業経験者向けの Advanced コースの2つのコースを設けています。2013年度で9回目を数え、Basic コースには51名、Advanced コースにも17名の参加がありました。

参加者に対して、研修会直後に事後アンケートを実施して、コースに対する満足度を5件法（1：まったく満足していない～5：非常に満足している）で評価してもらったところ、Basic コースは平均 4.57 点（グループ討論：4.70、ミニ講義：4.45、ボディワーク：4.02）、Advanced コースも平均 4.35 点（模擬授業・検討会：4.41、グループ討論：4.70）となり、本講座に対する高い満足度がうかがえます。

2013年度（第9回）の実施概要

日 時 平成 25 年 8 月 5 日（月）10:00～18:30

会 場 京都大学百周年時計台記念館 2F

実施プログラム - Basic -

9時45分～	受 付
10時00分～	開会式 挨拶 FD 研究検討委員会委員長 宮川 恒 趣旨とプログラムの説明 高等教育研究開発推進センター 准教授 酒井 博之
10時20分～	セッション1 グループ討論1：（自己紹介）「大学の授業をどう思うか」
11時20分～	セッション2 ミニ講義1：「大学授業の現在と未来」 高等教育研究開発推進センター 教授 飯吉 透
11時45分～	セッション3 ランチと自由討論
13時00分～	セッション4 グループ討論2：「大学の授業で教師に求められるもの」
14時00分～	セッション5 ボディワーク：「他者とのつながり・自分とのつながり」 京都文教大学教授 濱野 清志
15時20分～	休 憩
15時30分～	セッション6 ミニ講義2：「大学授業の現場から見たブレFD」 大阪体育大学 講師 吉沢 一也
15時55分～	グループ討論整理
16時30分～	セッション7 全体討論：「大学で教えるために」
17時30分～	セッション8 ミニ講義3：「大学で教えるということ」 高等教育研究開発推進センター 教授 大塚 雄作
17時55分～	閉会式 挨拶・修了証授与 京都大学理事 淡路 敏之
閉会式終了後	情報交換会（18時30分まで）



実施プログラム - Advanced -

9時45分～	受 付
10時00分～	開会式
	挨拶 FD 研究検討委員会委員長 宮川 恒
	趣旨とプログラムの説明
	高等教育研究開発推進センター 准教授 酒井 博之
10時20分～	セッション1
	全体討論1：(自己紹介)「教える側からみた大学授業」
11時45分～	セッション2
	ランチと自由討論
13時00分～	セッション3
	模擬公開授業・検討会
	立命館大学／京都学園大学 非常勤講師 井岡 瑞日
	白眉センター 米田 栄嗣
休 憩 (10分)	
15時20分～	セッション4
	グループ・全体討論
17時55分～	閉会式
	挨拶・修了証授与
	京都大学理事 淡路 敏之
閉会式終了後	情報交換会(18時30分まで)



研修会参加者からの感想 (事後アンケートより抜粋)

■Basic コースの参加者より

- ◆ディスカッションで考えを拡げることができました。積極的な議論からパワーをいただきました。他領域の方々と学問を考えることができました。そのことで専門性を見つめることもできました。
- ◆普段なかなか考えることのない大学での教える行為について考えることはとても貴重な経験だと思います。また、学問領域が異なる大学院生と交流することができたのはとても有意義でした。
- ◆大学院では研究が主な活動となっており、教育に関して考える機会はほとんどない。現在はTAとして学生に教えたり、質問に答えたりしているが、スキルやノウハウには自信がない。そのため、このような教育に関してプロの考えを聞いたり、同じことを意識している学生と交流する機会はとても有用でした。
- ◆社会人経験者・他分野(特に、普段かわりの少ない文系分野)と同じ土俵で議論することで、広い視野の意見を聞くことができた。また、最終討論において、非常に短い時間で意見をまとめ、発表する難しさを体験し、どうすれば良かったのか、考えさせられた。他グループの良し悪しも非常に参考になった。

■Advanced コースの参加者より

- ◆自分が当初もっていた問題意識(高校や専門学校とは異なる、大学での授業とは?がある程度、解決の方へと向かった。
- ◆授業における具体的な方法論(クリッカー、コミュニケーションペーパー、コースデザインなど)を学べて勉強になりました。教師が講義で伝えたいことと、生徒の意識に溝がある点に関して、多くの議論が出来たことが良かったです。
- ◆模擬授業のフィードバックがすばらしくて、ありがたかったです。グループワークもたのしかったです。どうもありがとうございました。
- ◆他の参加者の意見を聞くことができ、また大学教育における工夫の具体案を学ぶことができた。担当教員の知識が豊富で、またインタラクションが上手で、教員と学生のインタラクションのあり方を考えることができた。
- ◆いろいろな実例を聞けて、教育していく上でヒントになった。誰もが悩む点が似ていると感じて、面白かった。

新任教員教育セミナー

【新任教員教育セミナーとは?】

新任教員教育セミナーは、2010年度に試行され、2011年度より本格実施されました。本年度が4回目の開催となります。このセミナーは、「平成23年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」を対象として、〈京都大学らしい教育とはどのような教育か〉を考え、〈そうした教育を行うためにどのような教育サポートリソースがあるのか〉、〈大学・部局や教員はどんな教育課題を抱え、それにどう取り組んでいるか〉を知っていただくことにあります。前期の教育経験をふまえながら、全学、部局、個々の授業という異なるレベルで京都大学の教育について理解・議論できるようプログラムを構成しました。これまでに実施してきた研修の様子は京大OCW (<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja>) にもアップされています。また、当日配布したパンフレット『京都大学の教育サポートリソース』もPDFでダウンロードが可能です (URL <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/center/support-resource.pdf>)。ぜひご覧ください。

■ 概要 ■

日時：2013年9月10日（火） 13:00 ～ 18:00

場所：京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール

参加人数：89名

内 訳：教授10名、准教授26名、
講師13名、助教40名

2013 年度新任教員教育セミナープログラム

13:00	開会式（司会・進行：高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代） 開会挨拶：京都大学総長 松本 紘 趣旨説明：高等教育研究開発推進センター長 大塚 雄作	
13:10	セッション 1：ミニ講義 1「京都大学の FD・教育改善」 FD 研究検討委員会委員長 宮川 恒	
13:25	セッション 2：ミニ講義 2「京大生の学習の実態」 高等教育研究開発推進センター准教授 溝上 慎一	
13:45	セッション 3：ミニ講義 3「京大の教育的取組」 「教養・共通教育」国際高等教育院教育院長 北野 正雄 「京大の教育の国際化戦略」国際交流推進機構機構長 森 純一 「ICT 利用による教育支援」高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透 「京都大学の教育サポートリソース」高等教育研究開発推進センター特定助教 田中 一孝	
14:40	セッション 4：ミニ講義 4「私の授業」 人間・環境学研究科教授 鎌田 浩毅	
15:10	休憩	
15:25	セッション 5：グループ討論 「京大でどう教え、指導するか」	
16:55	休憩	
17:10	セッション 6：ラップアップ	
17:45	閉会式 閉会挨拶：高等教育研究開発推進センター長 大塚 雄作	

■セッション5のまとめ「各グループではどのような議論が行われたのか」

セッション5では、参加者が6つのテーマの中から自分の希望するものを選択し、テーマごとにグループに分かれてディスカッションが行われました。その結果は「セッション6：ラップアップ」で報告されました。各グループで行われたディスカッションの概要・要旨を以下に掲載します。

■テーマ1「学生を授業に巻き込む―『対話を根幹とした自学自習』を本気で考えてみる―」

事例紹介・情報提供：化学研究所教授 平竹 潤

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代

まず最初に、学生とコミュニケーションを図る方法が議論になった。平竹先生の「王道はない。人と人の交流だから、そこは距離を縮めていく」というご指摘は、あらためて目からうろこが落ちるものであった。先生のご専門は有機化学で、ポケットゼミには、約30人もの学生が受講する。そこでは、実際に学生の目の前で化学物質を見せ、触れさせ、理解を深めさせるという工夫をされている。毎回の授業で必ず教科書の演習問題を課し、そのレポート添削を学生のモチベーションを高める方法で、非常に丁寧にされていることには感銘を受けた。一方で、レポートの添削は時間と労力がかかるので、添削は大学院生やポケゼミの卒業生にも依頼し、そうした学生の成長も促しているとのことである。また、教育と研究の両立方法も議論になった。平竹先生からは、教育と研究の負担を教員によって変えてはどうか、という提案があった。これに対して、参加者からは、研究をしている人が教育をすべきである、教員の教育負担を減らすためにTAを活用するべきではないか、といった意見が出された。これは引き続き考えていくべき問題である。



(報告者：人間環境学研究科准教授 吉田鉄平)

■テーマ2「学生の多様化にどう対応するか?」

事例紹介・情報提供：工学研究科准教授 須田 淳

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター准教授 溝上 慎一

我々は学生の多様化にどう対応するかを議論した。多様化は主に、学力が低下した学生と優秀な学生が混在することで生じている。本学では昔は上位層、中位層、下位層がそれぞれ3分の1いたが現在は、中上位の学生が4割、その下に受身で、暗記だけで何とか入学した学生が4割、その下に全く勉強しない学生がいるそうである。須田先生の電子工学科では留年率が30%程度である。この問題に対して、須田先生には、個人的な取り組みや学科としての取り組みを紹介していただいた。例えば、1回生後期では、概論という授業の中で、研究室訪問とそこでの取材、そして取材内容のプレゼンを課し、各研究室の理解を深めさせる。また、夏休みのサマーキャンプにおける実習では、学生は今の勉強がどう役立つかを実践的に理解することでモチベーションが高まり、後の活動にも積極的になる。以上を踏まえ、やはり早い時期から学生のモチベーションを高める工夫をする必要があるという意見があった。また、30%の留年率については、むしろ学生が1留程度で壁を乗り越え、京大生としての質を保って卒業していけるのでは、という意見も出された。



(報告者：化学研究所准教授 登阪雅聡)

■テーマ 3「英語による授業をどう行うか？」

事例紹介・情報提供：農学研究科教授 天野 洋

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透

このグループの議論は、自分が担当する英語の講義に多様な国から留学生が参加し、さらに彼らの知識量も多様である、という想定で進められた。但し、実際の講義では、講義の開始直前まで詳細が不明な場合が多い。よって、英語講義ならではの構成、すなわち講義の事前準備、講義内容、講義後の対応を考える必要がある。事前準備は、留学生と教員間の連絡役になれるような、リーダーとなる学生を一人見つけて、連絡網を整備することが重要である。さらにその講義のシラバス作成が重要だ、という意見が提出された。講義内容は、論理のつながりやメッセージデザインが特に重要で、写真やグラフを活用し、当日資料の配布を徹底する必要がある。留学生は相対評価がどういう根拠で出されたのか、その公平性を重視するので、講義後は評価の根拠をきちんと説明する必要がある。留学生はヒアリング能力が日本人学生に比べて高く、日本人学生はリーディングとライティングが得意である。そこでウェブ掲示板を利用してディスカッションすることが、日本人学生の英語能力の向上につながる。また、実際に日本人学生との対話を通じて、理解のレベルをリアルタイムで探ることが重要である。留学生、日本人学生を問わず、メールや議論でやり取りしたことを「見える化」、つまり可視化して記録していくことが信頼関係の向上につながり、結果的に良い講義につながるのではないかと。

(報告者：医学研究科特定助教 鈴木裕輔)



■テーマ 4「学生の思考力を鍛える」

事例紹介・情報提供：教育学研究科教授 楠見 孝

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター准教授 酒井 博之

学生の批判的思考をどのように鍛えるかについて話し合った。相手を批判するのではなく、自分を省みるような思考は、研究への従事、また社会のリーダーになっていく中で必要である。思考力を鍛えるために、「授業への参加」という面から、学生の質問をどう促すかを議論した。楠見先生の場合は、授業の最後に質問カードを学生に渡し、次の授業でその質問に回答したり、授業の最後に2〜3人のグループで話し合いをさせ、各グループの意見や質問を受講者全体に紹介してもらう、という工夫をしているとのことだった。またネットのような匿名の状況下で、学生に活発な議論を促すという方法もあるだろうとの意見もあった。しかし、学生に議論させることは、理系の科目では難しい。なぜなら、医学部や薬学部などでは国家試験などがあるので、知識を詰め込ませる授業をしないと行けない場合があるからである。答えが一つの場合、ディスカッションもしづらい。また理系では、院生になってからプレゼン、研究費の申請書作成を通じて、鍛えられるという側面がある。一方で、例えば工学系では、批判的思考を学ぶ前に多くの学生が修士で大学を出る。よって早期に批判的思考を学生に教え、研究に興味を持ってもらう必要がある。他には、100人以上が受講するような大規模授業ではディスカッションをどうすればいいか、一般教養では思考力をどのように教えたらいいかという課題が出された。これらも今後持続的に考える必要がある。

(報告者：工学研究科助教 山本隆文)



【新任教員教育セミナーに対する参加者の評価】

■全体の総合評価

(回答者 74 名) 平均値：4.00

(回答者内訳)

1. まったく有意義ではなかった : 1 名
2. あまり有意義ではなかった : 3 名
3. どちらとも言えない : 8 名
4. まあまあ有意義であった : 45 名
5. 非常に有意義であった : 17 名

■セミナーの良かった点

- ・授業の準備、実施、レポート対応などいねいに対応しなければならないこと。人格のぶつかり合いだということなど、ディスカッションを通して理解すること（気づき）ができました。
- ・特にセッション4、5を中心に有意義な話が聞けて、今後の教育・研究に役立つ考えもいろいろと浮かびましたので、参加してよかったです。過去に「サイエンス・コミュニケーター・プロジェクト」に参加していたので、そのことも思い出しながら受け、よい機会となりました。
- ・京大の中で何か起きているのかについて知る機会はなかなかないので有益でした。
- ・online free education について、もっとすべての教員で議論していく機会があるといいように思います（もっと世界と京大の現状を知りたいと思いました）。
- ・日頃、顔をあわせる機会のない先生方、特に若い教員の方と知り合う機会が得られた。共通の悩みを抱えていることもわかり、問題のありがたさが明瞭になった。刺激を与えられた。
- ・教育についてのリソースが豊富であることを再確認できた。

■テーマ5「困難を抱えた学生に向き合うには」

事例紹介・情報提供：健康科学センター助教 上床 輝久

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター教授 大塚 雄作

学生の困難には身体的な問題とメンタルな問題があるが、今回はメンタルな問題を中心に議論した。メンタルな問題もいろいろなパターンがある。不登校にしても、全く大学に来ないケースや、来ても講義に出ないというケース、さらにそのまま退学してしまうケースがある。また、行動上の問題として、抑うつ傾向や、衝動的傾向、また他者を巻き込むような問題行動に出るケースもある。これらの原因として、学力差や、留学生の場合、言語や環境の問題がある。初年次では、受験教育から大学教育に適合できないこともある。また、学生本人が持っている性格、さらには、一部には精神疾患、うつ病、統合失調症、その他には、パーソナリティ障害、自閉症スペクトラム障害のような問題もあるかもしれない。それに環境が影響し問題が表面化する。問題が表面化した場合には、プライバシー、人権、心理状態も配慮して、とにかく傾聴を心がけ、相手との話し合いの基盤をきちんと作ることが重要である。入学直後、人間関係ができる前に不登校になる学生への対応は難しい。健康科学センター、そしてカウンセリングルームなどの相談窓口をきちんと紹介し、連絡を密にする必要がある。特殊なケースでは、保健診療所の神経科に相談することもできるが、まずは関連する部局を気軽に利用する姿勢を持つことが大事である。また、器質的疾患を抱えている場合もあるため、適切な医療介入も重要である。何より大事なことは、担当教官が問題が表面化する前から日常的に目配りをするということである。しかも、それは助教、講師、准教授など多数の目による多数の判断を通じて、学業面だけではなく、生活面や複数のルートで学生を見守ることが重要である。



(報告者：医学研究科特定准教授 三宅秀彦)

■テーマ6「博士課程院生のためのキャリア形成支援」

事例紹介・情報提供：学生総合支援センター・キャリアサポートルーム教授 梅田 幹雄

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター助教 田中 一孝

現在、博士卒業後の平均10人に1人しかアカデミックな世界に残れないという現状で、いかに各学生にマッチした企業への就職をアドバイスできるかという能力が、われわれ教員に求められる。そのため、博士課程に進む、あるいは博士課程の学生を指導する上で、以下の五つの点に気を付けなければならない。第一に、視野を広げてあげることである。博士課程に進学する学生に、本当に何を研究したいのかを気付かせて、その上で企業の魅力などにも気付かせることが重要である。第二に、社会が何を自分に求めているかを意識させることである。やりたいことをやるのはアマチュアであり、自分は何を社会へ売り込めるかを知る必要がある。第三に、企業への就職に対して決して劣等感を植え付けさせてはならない。第四に、就職後も学生とのつながりを重視することである。何らかの形で学生には、卒業後も後輩たちの指導や評価に携わらせ、アカデミアとのつながりを感じさせる環境を作る必要がある。第五に、学生には自分の将来を決める折り合いをどこかで付けることを意識させることである。状況が多様化している現在では、学生が自己責任で自分の将来を決めないといけな。また、これは十分に議論できなかったが、女性研究者を指導する際は、出産や育児等に配慮し、そのニーズを意識しなければならない。キャリアサポートルームや、女性研究者支援センターの有効利用を検討する必要がある。



(報告者：理学研究科助教 田中洋光)

■セミナーの改善すべき点

- ・セッション3の演題数が多すぎる。もう少しトピックを絞って、1つあたり、少なくとも20分以上充当し、スライドの要点を絞った方がよいのでは？
- ・ミニ講義1〜3は座学だと思うが、理解を深めるのが難しいので何らかの工夫があるとよい。
- ・教育法の実践的側面（セッション3の一部、4、5）をより拡充すべきではないか（制度的な側面はハンドアウト等でも紹介可能だから）。
- ・集団討論は事前に資料を配布、論点の提示（あるいは論点の集約のためのアンケート等）を行うともう少し有意義かと思った。
- ・分野や対象（学部、院生）によってアプローチが異なる側面があり、個別対応の部分をもっと深めることが出来るかと思う。

勉強会

(主催：FD研究検討委員会)

平成25年11月25日、附属図書館のライブラリーホールにおいてFD研究検討委員会主催の第9回勉強会が開催された。

まず、宮川恒委員長（農学研究科・教授）より、本委員会委員を対象に実施した「学生の自主的な学習を促す取組」に関するアンケート調査の結果について報告があった。学生の自主的な学習を促す取り組みに関して、(1)実施例、(2)工夫している点・注意点、(3)その他の意見、という3つの観点から調査結果について紹介された。

次に、学生の自主的な学習を促すためのICTの活用事例に関する2件の話題提供が行われた。喜多一教授（国際高等教育院）からは「学習支援サービスPandAの活用について」というタイトルで、今年度より本学に導入されたPandAの紹介が行われた。前半は、米国における大学教育へのICTの活用状況や本学におけるICT

の教育利用に関する現状説明の後、PandAの概要と著作権や個人情報保護等をめぐる利用上の注意点について解説がなされた。後半は、本学におけるPandAの活用事例として、語学教育、情報教育、少人数及び大人数授業が紹介された。続いて、酒井博之准教授（高等教育研究開発推進センター）より「学生の自主的な学習をサポートするツールについて」というタイトルで、米国のICTを利用した学習ツールとして、シミュレーション教材（PhET）、文献アノテーションツール（nb）、大規模オープンオンライン講座（MOOC）が紹介された。

最後に、調査報告と話題提供を受けて、今回の勉強会のテーマである学生の自主的な学習を促すことについて、出席した委員による意見交換がなされた。

(参加者：11名)

日 時：平成25年11月25日（月）14時～16時

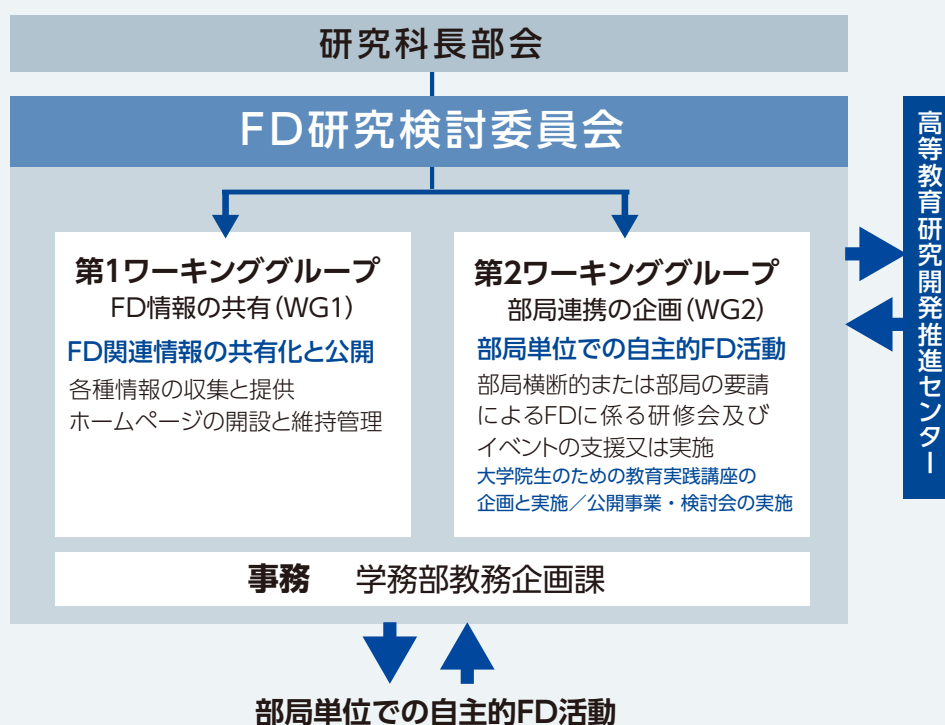
場 所：附属図書館3階 ライブラリーホール

内 容

1. はじめに _____ 14:00～14:05
2. 「学生の自主的な学習を促す取組」調査報告について _____ 14:05～14:15
(FD研究検討委員会委員アンケート回答報告)
3. 話題提供について
 - 講演①「学習支援サービス PandA の活用について」 _____ 14:15～15:00
国際高等教育院 喜多一 教授
 - 講演②「学生の自主的な学習をサポートするツールについて」 _____ 15:00～15:15
高等教育研究開発推進センター 酒井博之 准教授
4. 全体討論 _____ 15:15～15:45
5. まとめ _____ 15:45～16:00
6. その他

委員会概要

FD研究検討委員会は、本学の教育担当理事、各部局から選出された教員、高等教育研究開発推進センター所属の教員に事務部代表を含む計25名から成ります。この委員会の下に2つのワーキンググループが設置され、それぞれに委員会外部の教員も若干名参加しています。各ワーキンググループの活動内容等は組織概念図をご覧ください。



2014年3月 京都大学FD研究検討委員会発行

京都大学のFDに関する取り組みについては、

FD研究検討委員会のホームページ

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/> をご覧ください。

公開授業・検討会を企画される場合は、

学務部教務企画課(電話 075-753-2528) まで連絡ください。



2013 Mutual Faculty Development